

シンポジウム「ドイツ美術とプロテスタンティズム」

日時：二〇一八年二月八日(土) 一〇時～一八時

場所：明治学院大学白金校舎二号館三三〇二教室

緒言

今から五百二年前の一五一七年、アウグスティノ会修道士で神学博士のマルティン・ルターが、教会の贖宥状販売に対する異議を表明したところから始まった「宗教改革」は、キリスト教世界を揺るがし分断しただけでなく、信徒が自ら聖書を読み、自覚的に宗教について考え、表現していく種を蒔いた。教会、さらには社会の現状への不満を吸い上げた改革の大きなうねりは、美術をも巻き込まずにはいなかった。改革運動が進行中の時期には、教会の旧来のあり方を批判する側、擁護する側の双方で、自らの正しさを主張し、渦中の運動家を知らしめ、あるいは「敵」を叩くために、版画による画像付きのビラや活版印刷による書物が数多く出版され、視覚的刺激を巧みに使った情報合戦が繰り広げられた。また、聖画像の是非が改めて問われた結果、特に批判的な一部の宗派では、既存の聖画像に対するイコノクラスムが行なわれ、さらに「描いていいもの」が限定されたことにより、主題の選択や表現に新たな工夫が求められた。

ドイツは「宗教改革」の発祥の地であったのみならず、長い騒乱を経ても旧教・新教のどちらか一方に塗り尽くされることがなく、新教はさらに複数の宗派に分かれ、信仰を異にする諸団体

が隣り合って並存する状態が、十六世紀半ばから現在まで続いている。聖画像を教育手段として活用し、宗教空間や祭事の感覚的演出に巧みなカトリックに比べ、聖者や礼拝像を基本的に認めず、質素なプロテスタントは、美術においては不利だと言われる。

制約のある中で、また、宗派に限定されない西洋美術史全体の展開の中で、プロテスタンティズムはどのような「独自の」美術を生み出してきたのか。本特集は、ドイツにおけるプロテスタンティズムとその美術を、誕生時の闘争から現代のエキュメニズム運動まで概観し、宗教文化と造形の浅からぬ関係を考える試みとして、二〇一八年二月八日に明治学院大学白金校舎を会場に開催されたシンポジウムの記録である。

テーマの性質上、ドイツ語圏の美術史を専門とする美術史学研究者の方々に加え、神学側からの参加者は必須と考えられ、深井智朗氏をゲスト・スピーカーにお迎えしたが、ご都合により当日の出席が見送られたため、氏の寄せられた原稿の代読と、神学を代表してのデイスカッションへの参加は、急遽植木猷氏にお願いすることとなったことをお断りしておく。美術史では、それぞれの分野に精通したベテランによる発表に加え、博士号取得後間もない岩谷秋美・落合桃子の気鋭の両氏には、それぞれ新しい領域に挑戦し、新風を吹き込んでいただいた。

「美術とプロテスタンティズム」は、一日のシンポジウムでは到底語り尽くせない広がりを持った大きなテーマである。今回はルター派を中心としたいくつかの重要な様相を取り上げたが、カトリックやカルヴァン派を含めた、さらには世界に広がったキリスト教美術全般を視野に入れた考察や、時代・地域・ジャンルを限定したより肌理の細かい探索へと関心が展開していくきっかけになれば、主催者として幸甚である。

大原まゆみ